

## 第二十六章 幕間狂言

五カ月間にわたった拳党協騒動は、一転妥結して大団円を迎えたかに見えたが、それは党内だけのことで、対外的には何も解決されたわけではなかった。

自民党をめぐる国民の批判はますます厳しく、その中で、近々二、三カ月以内には議員任期満了となり、いずれにせよ総選挙による国民の審判を受けなければならないのである。しかも、党内抗争で時間を空費してしまったため、総選挙のための態勢づくりの余裕はほとんど残されていなかった。

臨時国会を前にした九月十五日、三木首相は党、内閣の改造を行った。それまでの人事体制は三木内閣発足以来のものだったが、この間、一年九カ月を経過しており、改造なしの内閣としては戦後最長のものとなっていた。重なる事件と三木首相の党内基盤の弱さのため、改造したくてもできなかったのである。

首相周辺では、「こんどこそ自前の内閣ができる」と人事に意欲を燃やした。拳党協側は、選挙後には総理・総裁を含めて体制の全面刷新は必至と見て、内閣人事にはそれほどこだわらなかったが、党三役、とくに幹事長に対してだけは重大な関心があった。来るべき総選挙に当って采配をふるう幹事長は、誰でもいい、というわけには行かなかったからである。

十五日早朝から南平台の私邸で組閣人事のまとめに入った三木首相らも、改造の要を党三役の人選に置いた。新聞辞令

は「幹事長に松野氏起用か」という三木の胸中を射た記事を流しはじめ、午前十時頃には、首相から福田、大平に連絡があり、幹事長松野頼三（福田派）、総務会長桜内義雄（中曽根派）、政調会長内田常雄（大平派）の構想に協力してほしいと言ってきた。この電話に出た福田は、「できるだけのことは努力しよう」と答えたが、大平は「松野幹事長にはなかなか反対が強い。派内で相談してみよう」と言っていて電話を切った。

松野は、吉田系から、緒方、石井派を経て、佐藤派の幹部となり、三木内閣の誕生と同時に福田派から政調会長に選ばれたが、やがて三木に接近して、福田派の不满を呼んでいた人物である。したがって、福田から松野幹事長案を知らされた福田派内部には、強い反発が生じた。福田派の会長代行で拳党協四人男の一人であった園田直が、熊本政界を二分するライバルとして松野の起用に難色を示したことも、これに拍車をかけたと言える。むろん、大平派も松野には反対であった。同じく総務会でも、過半数を占める拳党協側の総務たちが松野幹事長案に反発していた。

混乱を收拾するために、午後一時から、自民党本部の総裁室で、三木、福田、大平、中曽根、灘尾、松野、石田の七者会談が開かれ、結局、松野に幹事長を辞退してもらうことで妥協が成立した。三木は、ポストについては譲歩するが、三人の顔ぶれだけは譲れないと主張し、内田幹事長、松野総務会長、桜内政調会長の案がまとまったのは午後三時過ぎのことである。

幹事長に内定した内田は、大蔵省で大平の六年先輩。政界への出馬は大平と同じ昭和二十七年であり、政策通として知られてはいたが、政治的な手練手管を得意とするタイプではなかった。自らもそのことを知悉していた内田は、幹事長就任の知らせを聞いて驚くとともに憤激し、大平が記者懇談をしている最中の宏池会に血相をかえて飛びこんできた。大平の姿を認めるなり、内田はいきなり食ってかかった。

「私は幹事長なんかやりませんよ。政調会長なら少しはお役に立てると自分でも思っていたのだが、いま聞いてみれば幹事長だって言うじゃないですか。そんな、中華料理じゃあるまいし、テーブルをぐるりと回すなんて……。妥協もいけど、人を見て決めてくれ。ぼくは幹事長なんていう柄じゃない。」

事務局員が、「先生、いま記者懇談中なので暫く待っていただけませんか」と注意をうながしたが、内田は黙っていない。「懇談中だろつが会見中だろつが、私は少しも苦しくありませんよ。記者の皆さんがいるならなお結構、皆さんにも聞いてもらいましょう……。」

大平、鈴木、宮沢といった宏池会の幹部は激昂する内田を総がかりで奥の部屋に連れ込み、暑い日に汗をながして説得にこれ努めたが、内田は頑として聞き入れようとしなかった。

記者団から情報が入ったのだろつ、三木側近の海部俊樹官房副長官も、内田説得のために官邸から飛んできた。三木首相としてみれば、今日中に改造人事を済ませ、宮中での認証式も終わらせるつもりで、宮中の予定もお願ひしてある。内田幹事長の線がこわれたら、苦心に苦心を重ねて妥協したものが故の木阿弥となり、その結果、どんな事態が招来されるかわからない。みんなの説得によって内田が折れ、「とにかく官邸に行くだけは行く」と言つて宏池会を出たのは午後五時を過ぎていた。

その夜、改造は終わった。内閣では、拳党協に入らなかつた閣僚は全員留任した。拳党協に同調して国会召集の閣議に署名を拒否した閣僚は、福田、大平両相を除いて、全員交代した。入閣した閣僚のメンバーは三木色が強く、とりわけ福田派には入閣者についての事前の相談もなかつたという。

改造の済んだ翌十六日の夜、拳党協十五閣僚の慰労会があつた。去つていく十三閣僚をねぎらつたという名目だったが、まだ戦いの余燼はさめぬ雰囲気は漂つており、金丸前国土庁長官は、「われわれの目的はまだ達していない。あとは、福田、大平のお二人でよく話し合つてまとめてください」と述べた。要するに、今後の政権の受け皿をどうするかということである。

拳党協騒動の間、ポスト三木の政権担当者誰にするかという「受け皿」問題は、政局を左右する決め手として見え隠れしていたが、総選挙、そして政変が間近いとなると、もう避けては通れないところに来ていた。

話合いか公選か、これは後継者決定に当つていつもつきまとう問題であるが、党を二分しかねない騒動のあとで、また

公選で争うことはあまりにも困難と思われた。『公選なら大平、話し合いなら福田』という党内の常識を前提として、福田周辺は話し合いに意欲を示し、あらゆる人脈を動員した。新日鉄の永野重雄会長、帝王学の師として知られた安岡正篤らが福田政権実現の線で保利茂らと話を進め、工作は多様に展開された。永野邸の大福会談、上原正吉邸の大福会談、角福会談、大平・河野（謙三）会談など目まぐるしい裏の動きがあった。大平の腹心、田中六助もこの線で動き、十月上旬、三日間にわたって大平とこの問題を討議した。

大平の心境は単純ではなかった。話し合いを拒否し、党則によって公選ということになれば、政権はまず間違はなく自分にまわってくるであろう。政権を担当するのは政治家の理想でもある。政策も長い間かかって準備してきた。意欲も体力も決して誰にも負けるとは思わない。いま、政権を前にして、これを他に譲るといことが政治家として取るべき道であるのか。それが政治家の責任を果たすことであるのか。だが一方、ここには長い抗争に明け暮れ、疲労しきった党がある。もし公選によって新たな争いが起きれば、党は果たしてその存在を全うすることができるだろうか。

田中六助は、三日間の説得のあと、十月六日、大平から一つの感触を得た。

「私はすぐに福田さんに連絡をとった。福田さんは赤坂の料亭の部屋で待っているというので私は行った。大平は承知したよ」と言つと、福田さんは喜んで、「一年でもいい、一年半でもいい」と言った。私は、『後は大平に頼む』と念を押し、福田さんも同意した。それを私がまた大蔵省の大平のもとに報告に行った覚えがある」と田中六助は語っている。

このことは福田から保利に伝えられ、十月十日、保利と大平は神奈川県茅ヶ崎のスリーハンドレッド・クラブにゴルフに出かけた。のちに、保利がその衆議院議長時代の秘書岸本弘一に語ったところによれば、その時の模様は次のようだったという。

「ぼくは政権にはこだわるものではありませんよ」と大平が言った。

保利が「あとのことを決めておかないと党の足並みが乱れる。ところが、君と福田君がいる。そこでどうするか心を痛めていたのだが、君の決断で救われたよ。あとはぼくが責任をもってきちつとする」と答えると、大平は、「証文なんかも

らうても、どうにもならないことはわかっていきますから、結構ですよ」と言った。

「いや、ぼくが中に入るのだから、そういうわけには行かない」。それが保利の心境だった。大平は、のちに周辺のものに、「保利さんはぼくの意志を確認するために会ったのだと思う」と述べている。

ポスト三木の「受け皿」について福田、大平間に合意ができると、保利は、椎名副総裁の説得にかかった。この会合の様様を、後に保利衆議院議長の秘書をつとめた岸本弘一ら関係者の話から総合すると、それはおよそ次のとおりである。

「椎名さんは福田さんにすく反対した。『あんな者にできるかね。いったいどのくらいやらせるのだ。二カ月かね、三カ月かね。三カ月もやれるのかね』。これに対して保利さんは、『まさか、二、三カ月というわけにもいかんでしょう。やっぱ二年以上はやらせない』と云った。」

だが、椎名の不満は、後継者よりも、挙党協の三木首相に対する態度にあった。当時の内情について椎名の政治秘書だった池浦泰宏は、次のように語っている。

「椎名さんは、どんな形にする三木さんを党の力でやめさせたという形をとりたかった。だから、三木解任決議を最後まで主張した。もうこれ以上はしようがないという段階でも、椎名さんは三木さんをやめさせると粘っていた。最後は三原さんたちまでが椎名さんをなだめに入った。……椎名さんは三木さんが死んだ土俵しか見ていない。そこで誰が相撲をとるのかは別問題だった。保利さんは、『そんなことをしたら党が分裂する』と言っただが、椎名さんは、『三木をやめさせれば、誰かがならなければならない、それは電光石火決まる』という考え方だった。」

椎名は三木を裁定した責任をあまりにも強く感じていたのだらう。

受け皿論議の最後の詰めは、十月二十日と二十七日の二回にわたり、品川のホテル・パシフィック東京で行われた。福田サイドは福田、園田。大平サイドは大平、鈴木。この四人と立会人の保利が加わって、計五人の会談となった。

第一回会談は大平の意向とそれをめぐる政局運営の基本の確認が第一の目的だったが、同時に、さし迫る総選挙をどう

戦うか、年を経て腐蝕のきた党をどう立て直すか、今後の政治運営をどう分担するか、政局転換の段取りをどうするかなど、党が当面する危機の打開について討議が行われた。

第二回目は、一回目の会談の整理と確認が行われた。出席者の一人、團田はこう記している。

「三木内閣は間違いなしに総辞職するだろうが、そのあとは自然の流れからすると大平内閣が成立する。それはそれで良いことだが、しかし私のかついできた福田赳夫さんがそれでは、ひよっとすると永久に政権を取れなくなるというので、大平さんに頼みこんだのがホテル・パシフィックでの五者会談であった。……この席ではむずかしいことは大平さん、ひとこともいわなかった。そればかりか、福田さんが総理を二年つとめて「それから先のことをどうするか」という話になった時、大平さんが初めて口を開いた。「二年後のことを今ここで話し合っても仕方ないんじゃないでしょうか。二年後のことは二年後にあらためて話し合うことにしようじゃありませんか」。

下司なら「二年後に政権を大平に渡す」と文書にしろ」と迫るところである。しかし大平さんはその逆を行った。私は胸に迫るものがあつた。」(『回想録』追想編)

大平は、とくに挙党協騒ぎが大詰めで一転妥結した後、三木首相退陣の保証について記者団から質問されたとき、「このような政治的な問題では、物理的保证や証文がとれるものではない」という意味のことを答えたが、岸元首相の大野伴睦にあてた証文の例をひくまでもなく、この種の約束は、たとえ証文があつても、その実行を迫れるものではない。もし明らかにしたところで、政権を私議したという譏りを受けるのが関の山であろう。証文が何百校あるうとも、人間としての信義がなければ、一切は無効となるのである。

團田がこのときの大平の発言について、「保利さん、大平さんに負けました。これじゃ二年後、私たちは大平政権樹立のために走り回るといふことを約束させられたようなものですね」と会談の帰り道に話し合ったのも、「人間の信義」を保証とした大平の態度に打たれたからであろう。

NHK記者から團田の政治秘書に転じた渡辺亮次郎は、著書『團田直の全人像』で、この会談で確認された文書は次の

ようなものであったと書いている。

「一、ポスト三木の新総裁及び首班指名候補者には大平正芳氏は福田赳夫氏を推挙する。

一、総理総裁は不離一体のものとするが、福田赳夫氏は、党務を主として大平正芳氏に委ねるものとする。

一、昭和五十二年一月の定期党大会において党則を改め総裁の任期三年とあるを二年に改めるものとする。

右について、福田、大平の両氏は相互信頼のもとに合意した。

昭和五十一年十一月

福田 赳夫（花押）

大平 正芳（花押）

園田 直（印鑑）

鈴木 善幸（花押）

立会人の保利は署名もしなければ手も触れず、のちに大平に「くれぐれもあの文書は表に出さないように」と注意したという。むろん、大平もこの文書の存在を遂に自ら語ったことはなかった。

十月十五日、遅ればせながら、臨時国会の終幕に大平蔵相らが最も熱意をこめていた財特法が成立した。これによって、政局は、任期満了選挙一本に絞られた。この選挙の実質的な運営に当たった奥野誠亮は、次のように述懐している。

「選挙というものは総力戦です。作戦を立てて全体を動かしていく。政策、スローガンもはっきりさせなければならぬ。どついつ候補でいくかについても計画的に体制を考えていかなければならない。そついつ意味では選挙をやれる条件には全くありませんでした。」

党のこういふ状況に加えて、派閥も疲労の極にあり、候補者一人一人は、マスコミ、世論、野党の非難の声の中で、自分の力だけを頼りに全力をあげて生き残る以外になかった。

そして選挙結果は、予想より遙かにきびしいものとなった。当初は公認候補で二百六十名ぐらゐまで落ち込むであろうと見られていたが、これを大きく割り込んで、当選者は二百四十九名。自民党は結党以来はじめて過半数を下回ったのである。無所属当選者の入党、追加公認を加えて最終的には二百六十一名になったが、過半数の二百五十五名を上回ることわずかに六名であった。国民は自民党に冷厳な審判を下した。考えてみれば、これまでの政争は結党以来つねに安定過半数を確保し、政権が自らの手中にあるという状況のもとでの争いであった。だが、いまやその政権を支える基盤自体が音を立てて崩れている。三木も反三木もともに敗者であり、全党は息をひそめて三木首相の出入を見守った。

一方、社会党と共産党も振わなかった。爆発的人気を集めたのは自民党から離党した河野洋平たちの新自由クラブであり、また公明党、民社党も進出した。すなわち、自社二大政党がともに沈んで、中道政党が盛りあがった。先に伯仲状態に入っていた参議院同様、衆議院も与野党の議席数が接近し、政治は、自民党安定多数の時代から保革伯仲時代という新しい局面を迎えたのである。

こうした状況の中で、三木体制の中でただ一人、反三木陣営を代表して党の運営にあたった内田幹事長は、全く未知の選挙戦を指揮し、苦しい党の台所を切り盛りするという困難な仕事を一手に引き受けた。しかも、選挙後には政変が待っており、それを何とか円満に処理しなければならぬ。内田は文字どおり寝食を忘れてこの政変劇の舞台回しの役をつとめた。

十二月十七日、三木首相はついに退陣声明を発表した。その翌日、大平は内田の功績をたたえてこう言った。

「もしおれがあつた時、幹事長をやっていたら、ぬきさしならぬことになっていただろう。挙党協はさまざまな注文をつけて迫ってきたらうし、三木も拒絶反応を見せただろう。党の運営はニツチもサツチもいかなくなるころだった。だが、内田幹事長だからうまくいけた。また党の分裂も避けえた。内田さんは「おしゃべり幹事長」なんて悪口を言われながら、どっち寄りでもないようなことを言って、とにかく党を分裂させずに、ここまでもってきてくれた。彼の果たしてくれた役割は機械でいえばペーリングのようなもので、その功績は実に大きい。いつの日か内田さんに報いねば……。」



「内田幹事長」は苦しまぎれの起用ではあったが、内田は、人間が難局に直面したとき、自分も知らなかったような真価を發揮することがある立派な例を示したのである。

幹事長として党の分裂回避に全力を尽くした内田は、幹事長退任後、間もなく病を得て他界した。大平は故人の手柄を「為して待まず、功成りて居らず」という在り方を自然に示された。……その進退は一幅の絵であり、見事な芸術であった」と最大級の讃辞をもってその弔辞を飾った。

三木退陣の後をうけて、後継総裁と首班指名候補を選任するため、十二月二十三日、党大会に代わる両院議員総会が開かれた。この前日、立候補が締め切られたが、届出を出したのは福田一人であったため、福田は満場一致で選出された。大平は不出馬の弁を次のように語った。

「石油危機後の経済的諸困難の克服も、伯仲状態を迎えた政治情勢も、きわめて厳しい。その上、いまの自由民主党という土俵は、私と福田さんが四つに組んで相撲をとれるほど広くはない。いまはまず党という土俵をしつかりさせることだ。その上で、堂々と公選でも何でもやらねばよいではないか。何よりもまず、わが党は政権政党として伯仲国会を運営するという国民の負託に応えるところがなければならぬ。」

大平はそう述べたあと、一転して大福提携にふれ、「私と福田さんは、生まれも違えば、生い立ちも異なり、これまで親しい間柄というより、対立する関係にあった。それぞれの政策は、外交、防衛、経済など党の異なる主張を代表してきた。こんど、この異なる二つが協力し合おうというのだが、その極端に相異なるものが提携し、協力し合うところがあるが面白いのだ……」と独得の哲学を展開した。

大平は後に、元『毎日新聞』論説委員の評論家田中洋之助との対談を単行本の形で出版した（昭和五十三年九月三日刊）が、この本の題名を相談された大平は、『複合力の時代』という名前を選んだ。この時の説明で大平は、「これからは、産業も技術もみな異質のものの組合せによって新しい活力、新しい局面を開いていく時代だと思ふ。異質のものの複合は、

単にそれぞれの和ではなく、より大きな新しいものを生み出していく。その力によって未来を切り開いていく時代だ……」と述べているが、大福提携の政治的意味もそこに見出していたのであろう。

と同時に、また、それは若い頃からの楢田論的発想の展開でもあった。自由民主党という間口の広い人間集団　政党を楢田とすれば、一つの焦点は楢田もしくは楢田派であり、もう一つは大平もしくは大平派である。この二つの力の緊張関係で党を一つにまとめ、新しい活力を発揮して難局に対処していこう。この楢田は二つの焦点に信頼関係が保たれれば大きな威力を発揮するだろうが、相反発するならば、相剋と混迷を招くに至るであろう。しかし、いまは、生まれも育ちも異なる二本の巨木が合掌を作り、力を併せて老朽化した党の屋台骨を支えて行かねばならない　これがこの時の大平の考え方であった。

楢田起夫総裁就任の翌二十四日のクリスマススイブに臨時国会が召集され、首班指名が行われた。出席議員数は五百八名。楢田は過半数を上回ることわずか一票の二百五十五票を獲得して首班に指名され、その夜の人事で大平の幹事長が決定して、大福提携と称される新しい時代が始まった。

それにしても、大平は、この約一年間の党内抗争をどのように見ていたのであろうか。彼は、翌年一月の党大会における幹事長としての『党情報告』の中で、やや公式論的にはあるが、次のように述べている。

「……かえりみるに、昨年二月早々、米国上院においてロッキード事件が突如として公にされ、爾来この事件をめぐる世論の高まりの中で、わが党が振幅のはげしい動揺を続けた年でありました。

政治不介入の原則のもとで、この事件の真相の徹底解明を進めることについては、わが党には誰一人異論をさしはさむ向きもなかったし、事実、政府は米国政府の協力をもとりつけ、鋭意その解明を急いだのであります。わが党にとつてこの問題はロッキード事件の処理自体にあったのではなく、この事件をめぐる政局の処理にありました。すなわち、その真相を究明しつつ、早期に国会を解散すべきであるとする側と、そうではなく、まず総辞職して国民の前に本件に伴う政治責任を明らかにするのが先決で、解散は急ぐべきではないとする側とが鋭く対立したのであります。もとより、そ

のいずれもが党の将来を思うものでありましたが、このことが臨時国会の対策をはじめ党の重大な意思決定に深刻な影響を及ぼし、ついに党内紛争の様相を帯びるに至りました。」

苦悩に満ちた一年の回顧から始まり、任期満了選挙の敗北、福田内閣の発足と多事多難な前途、国民の自民党に対する根強い不信感を述べたあと、大平は次のようにつづけた。

「長きにわたる政権担当の間に見られた党紀の弛緩と時代に対する対応力の不足は、心ある国民の期待に添いていないうらみがあります。新しい政権は、何を措いても、かかる不信を解消し、わが党の立直りを求める国民の期待に応えるため全力をあげなければなりません。」

なお大平は、この総選挙の直後に兄数光を失った。数光は町民の信望厚く、当時、豊浜町の町長を三期つとめ、すでに後進に道をゆずっていたが、弟正芳のこの十回目の選挙の成績が総裁への道の重要なステップだと考え、十万票の獲得を目標に異常な熱の入れようであった。

選挙が公示されて間もなく疲労がひどくなり、周囲のものが数光の嫌がるのを押し切って入院させた。十二月三日夕刻全国遊説を終えて愛媛県境から選挙区入りした大平は、そのまま病院に向い、兄を見舞った。数光は、弟の姿を見るなり、「なんぼとれるんぞ」と、大平派議員の当選見込みをたずねた。総選挙が終われば、総裁公選があるという睨みである。大平は、「前より増えるぞ」と答えた。地元遊説の日程はきびしく、正芳はあと一度兄に顔を合わせただけで、あわただしく帰京した。

開票の結果は、大平は九万八千四百十二票、得票率四二・三％の第一位、堂々たる成績であった。数光は手をたたいて喜び、「病気はもうなかつた。早く家に帰してくれ」と言っていたが、七日夕方、突然の発作で死亡した。死因は心筋梗塞である。